

## 日本語教育機関が出張して行う大学での教育実習指導の実際 Practical aspects of hands-on teaching training held at university led by Japanese language education institution

竹見公仁子 TAKEMI, Kuniko

公益財団法人 京都日本語教育センター 京都日本語学校

The Kyoto Center for Japanese Linguistic Studies Kyoto Japanese Language School

【キーワード】連携、多様性、ホームグラウンド、実習指導環境

### 1. はじめに

公益財団法人 京都日本語教育センター（以下、当センター）では、2011 年 7 より公益財団法人となり、責務の一つに日本語教員養成を挙げ、取り組んでいる。それに先立ち、2003 年度より近隣の大学の要請を受け、大学院生の教育実習の一端を担っている。本稿ではその中の大学に出張して行う教育実習を紹介し、その可能性を報告する。

### 2. 経緯

日本語教員養成に関わる大学との連携を当センターでは、近隣の 2 大学と行っている。2 大学の受託内容はそれぞれ異なっており、一つは教務事務などが中心の学部生対象のインターンシップ、もう一つは大学院生の教育実習である。教育実習は、当センター内の日本語集中コースにおいて行うものと、大学の委嘱で行っている短期日本語教育プログラムの中で行うものに大別できる。

短期日本語教育プログラムは 1996 年より毎年大学構内で継続して行われており、プログラム実施ごとに、大学側は日本語教育担当教員と事務局の職員が、当センター側は校長や大学に対する窓口となる担当講師の代表らが、事前事後の会議を行い、綿密な連絡をとりながら、対等な立場で連携して行っている。使用テキストやレベル設定などは大学との協議で決定されるが、授業内容や指導方法は当センターに任されており、互いに信頼できる関係がこのような連携の中で築かれてき

ている。

2003 年に連携先の大学に日本語教員養成を行う大学院が設置され、教育実習も合わせて担当することとなった。

一方、従来より四年制大学の新卒者や大学で日本語教育課程を修了した者を講師として雇用しており、彼らの持つ強みと課題について把握しているため、大学院生の教育実習指導に、我々の経験が生かせる。また、人材発掘の面からみても、教育実習生を受け入れることは、有益であると考えた。

### 3. 出張して行う大学での教育実習指導の特徴

#### 3-1. 教育実習生の背景

連携先の大学院には、学部での専攻が、国際関係学や法学、社会学などさまざまで、日本語教育を専攻していない学生も多数いる。また、社会人、現職の日本語教師、留学生も在籍していて、多様である。教育実習は選択科目の一つで、実習を選択する学生は、現場を知らない者、過去に経験したことのない教場やレベルでの実習を希望する者などである。

実習先の選択肢は、国内の日本語教育機関、海外の提携先の大学、そして、大学院生の在籍する大学で行われている短期日本語教育プログラムと複数ある。

### 3-2. 実習の形態

教育実習期間は2週間で、前半の1週間は実習クラスの見学と教案指導などに充てられ、後半に50分2コマの教壇実習が行われる。実習授業はビデオで撮影され、後日、大学の教育実習指導教員から指導を受けるために使用される。

我々から大学の教育実習指導教員への連絡は、途中経過を知らせる簡単なメールをするほか、指導後は、出席状況／事前指導／教壇実習／事後指導／実習生の様子や評価などを書面で報告する。

以上、形態は、当センター内で行われる教育実習と同じである。しかし、当センター内の教育実習であれば、他の講師と接触しながら教案の準備などができるが、大学内で実習を行う場合、実習クラスの授業見学と実習担当講師の指導がなければ大学内に放っておかれてしまうことになる。

### 3-3. 大学側の考え

大学内で行われる教育実習は、大学の日本語教員が指導するか大学の日本語教育の方針に従って行うのが普通と思われる。ところが、大学の実習指導教員からは本学の日本語教育を踏襲しなくてもよく、我々のいづれどおりの授業でよいと告げられた。その理由を問うたところ、

- 1) 本学の大学院生はバックグラウンドが様々であることが特徴の一つで、希望する就職先も多様であるから、多様な実習先を用意したい
- 2) 大学院生には、できるだけ多く現場を知ってもらいたい
- 3) 日本語講師も指導方法も様々であり、生の授業を見てほしい

という回答を得、我々はいつものとおりに授業を行い、その中で実習指導ができると知った。実習指導担当後、大学側から、実習生は学内において、期待どおり多くのことを学んでくれているとの報告があり、初年度より毎年継続して行われてい

る。

### 3-4. 教育実習生の視点から

大学内で行われる教育実習を選んだ学生はその理由として、

- 1) 普段と同じ生活環境で実習をしたい
- 2) 大学の設備についてよく知っているのも、実習クラスの学生に何らかの還元ができる
- 3) 初めての实習なので、できるだけストレスを感じない状況で実習を行いたい
- 4) 自分の後輩になるかもしれない学生に日本語を教えたい
- 5) 実習中の生活費、交通費などが抑えられる

などを挙げている。

実習生の通う大学、つまりホームグラウンドで活動できる強みを生かそうとしている姿勢が見受けられた。

実習後の感想は、授業を行ったクラスの学生とよい関係が作れた。後日、実習クラスの学生が学部生として在籍し、勉学に励んでいる姿を見て達成感を感じた。学外へ出なくても、他機関の日本語指導が見られてよかったなど、肯定的であった。

### 3-5. 実習担当講師の視点から

出張先の大学での授業は、事務所と教室を使用するだけで、大学の他の施設設備についてよく知らない。実習指導は、学生が帰った後の教室か、空き教室を使用する。そのため、参考となる他の教科書や、センターで独自に作成した教材や参考資料を必要に応じて見せながらの指導が難しく、限られた指導しかできない状況にある。

また、先に述べたが、実習生が他の講師と話す機会が少ないことも問題の一つである。短期日本語教育プログラムでは、クラス数が1～3と少ないことから、他の講師と接することが少ない。また、我々が請け負っている授業が終わると、すぐ

に大学を出るので、日本語講師の教室外での動きを知る機会が限られてしまう。

実習指導環境は、よいとはいえない面があり、工夫が必要となる。

### 3-6. 実習クラスの学生の視点から

実習初日に、教室で実習生を紹介したときから、実習クラスの学生は留学先の大学の院生に対して敬意をはらい、また親近感をもち、友好的であった。教壇実習のときには友好的であることがいいとはいいきれないが、学生は実習生のことをよく理解してくれている。

教育実習が行われることは、短期日本語教育プログラムの計画時には知らされているので、教壇実習のほかに日本語授業のスケジュールに実習生が大学内の施設を主体的に案内する時間を入れている。実習生も案内する時間の意図をよく理解し、学生の視点でコメントしながら説明するので、短期の留学生にはありがたい時間となる。このとき、実習生はホームグラウンドを自信を持って紹介するので、案内してもらう学生は安心して、日本語でやり取りしながら必要な情報を得ている。

実習生が留学生で、同国人を教壇実習で教えたことがあったが、流暢な日本語と十分に練られた授業を受けて、尊敬できる先輩に会えてうれしい。日本語教師になりたいわけではないが、自分の理想とする将来像も見えてきたと話してくれた。

## 4. 指導上の留意点

上記 3-2 および 3-5 で述べた実習指導環境を改善する工夫として、

- 1) 授業見学や指導のない時間に、当センターに来てもらう
- 2) 実習担当講師が、自分の経験だけではなく、他講師の経験談なども折を見て話す

などを行った。大学からの移動はバスや自転車で

でき、実習生の負担が少ないことも好都合である。実習生にとって、実習担当講師が“日本語教師像”そのものになることを避けるため、移動してきたときに、話し相手になってもらえる講師を積極的に紹介したりした。

すでに、3-6 に書いたように、実習生に大学内を案内してもらう時間を入れているのは、学外から出向いている我々の施設設備の知識不足を補ってもらうためだけではなく、ホームグラウンドにいる実習生の利点を生かすためである。実習生が自信を持って、このように大学内を案内し、施設設備の説明を実習クラスで行う体験は他の実習ではできないことである。

## 5. 有用性と今後のかかわり

上記 4 で述べたように工夫は必要であるが、出張して行う教育実習指導は、大学の要求にも実習生の要求にもこたえられていると認識している。

本稿では、詳しく述べなかったが、この教育実習指導には、当センターの専任講師も非常勤講師もあたっており、事後にはどの講師も自己の振り返りができ、いい勉強になったと言っている。

実習生は大学院修了後の進路を国内外に求め、その活躍の場を見ると、日本語教員養成の必要性和公益性を鑑みることができ、公益財団法人としての責務の一つを果たしていると再確認できる。そして、今後もこのような近隣の大学との連携の中での教育実習指導を継続して行っていきたいと考えている。